



の髓まで公務員体質になっているため、なかなか営利を追うという発想に焦点が合わない。遊覧船を一回運航するのにも経費がかかる、言われるままはいいと練習なんぞに付き合えるか、というのも考えてみたら当たり前のこと。まして、企画した会社になれば、県の助成金も得ての事業、むぎむぎと赤字でしたなどと言えるはずがないのだ。お金を払って乗るのだから、お客さんの見る目は厳しくなつて当然なのです、と釘を刺されると、背筋が薄ら寒くなってくる。

しかし、今さら逃げも隠れもできず、やりますと言つてしまつたからには、できる努力を積んでいくしかない。この厳しさを伝えたあたりから、子どもたちも保護者も目の色が変わつてきた。ぼくは、船の運航に合わせてシナリオに手を加え、プログラムの修正を繰り返して、子どもたちは家族で相談して、怪談をうまくつなぐための工夫を凝らし始めた。八雲や松江に関するクイズをこしらえた親子があれば、それを落語教室全体に流し、共有を呼びかけた。「ゆうれい船アイディア集」は、それから続々と集まり始めた。自分のお気に入りスポーツを紹介しては。おすすめ観光地に実際に行き体験記を写真とともに発表してみたら。乗船してくれたお客さんにプレゼントを渡したい。などな

ど、届けられる写真や具体物に、子どもたちの本気具合がひしひし感じられた。

実地の練習も、ペアで単独で、家族が都合を付けて繰り返した。それぞれに年間バスポートを購入して費用の負担を抑え、他に乗船客がいらないときは船頭に頼み込んで、声を出してリハサルさせてもらう、途中から観光客が乗ってくれば、再び黙つて、心の内でつぶやいてはコースの中はどうはまるのか確認する、という具合だ。

熱中症警戒アラートが発令され、欠使もたびたびという中で練習を重ねる教室生親子、ぼくも可能な限り同乗すると宣言していたので、連絡が入れば乗りに行った。乗船場のいつも同じ所に駐めるべく青い自転車遊覧船職員への目印にもなつたようで、あるとき運行管理の職員に声をかけられた。

「今日も先生、来ていましたね」

「なんと、貸し切り船にしてみました。おかげで練習しつかりできました。わざわざご配慮いただきましてありがとうございます」

「さあ、私は知りませんよ」

とニヤリ。それぞれの立場でこどもたちのために一肌脱ごうか、そんな空気がいつしか生まれていたのだった。(つづく)

老い老いに

木幡智恵美

47



々に体裁を変えながらも、講演録、随筆、詩などを載せながら、夕焼け通信は四百号を超えて発信をし続ける。そして、九年目も年を越え、二〇二一年に突入した。さて、世界を揺るがす出来事が相次いだ二〇二一年の次の

年は、どんな年だったのだろう。読売新聞読者が選んだ十大ニュースを挙げてみる。

一、ノーベル物理学賞に小柴昌俊さん、化学賞に田中耕一さん 二、史上初の日朝首脳会談、金総書記「拉致」認め、被害者五人帰国 三、サッカーW杯、初の日韓共催で日本ベスト十六 四、巨人が日本一、松井秀喜選手が大リーグへ 五、鈴木宗男衆院議員をあつせん収賄容疑で逮捕 六、牛肉「偽装」事件相次ぐ 七、高円宮さまご逝去 八、秘書給与流用疑惑で辻本清美、田中真紀子両衆院議員が辞職 九、日本総領事館で中国武装警察が亡命者連行 十、小泉首相が田中真紀子外相を更迭

前年に比べ、上位に朗報が並ぶ。ノーベル賞は、私が子どもの頃は湯川秀樹氏くらいで、その後朝永振一郎氏、江崎玲於奈氏と続いたものの、十数年に一人くらいの受賞だった。それが一度に二人も受賞者が出たことは快挙だったのだ。二位に上がっている拉致問題、今は日朝関係が非常に緊張しており、拉致被害者についても進展が見られない状態だ。それがあの年は、大展開があった。当時の小泉首相と金正日総書記の首脳会談で金総書記が「拉致」を認めて謝罪し、被害者五人を日本に帰したのだ。五人が飛行機から降りてくるテレビの映像は今も目に焼き付いている。次いで日韓共催のワールドカップ。普段サッカー観戦はしないのに、その時ははまつてしまった。その年の夏に韓国平和ツアーに参加し、旅行記を連載することになるのだが、その第一回目に次のように書いている。

「今年の六月、寝不足の日が多かった。サッカー熱に冒されてしまったのだ。これまでにサッカーに全く興味がなかった私が、決着がつくまでテレビにかじりついていたらいだから、そのフィーバーぶりはすさまじいものだった。そんな中で、韓国平和ツアーへの決意を固める。ひよつとして安貞桓にすれちがうかもしれないし、なんてありもしないことを考えたりして」

30代フリーター 前に「民主主義の劣化」について話したときに触れたギリシャの経済学者やニス・バルファキスは『テクノ封建制』という著書の中で、資本主義はもう終わって「テクノ封建制」に取って代わられたと言っている。資本家が労働者を搾取して利潤を得るのではなく、GAFAMなど巨大IT企業がネット空間にプラットフォームという名の「クラウド封土」を築き、それを利用する人たちを「クラウド農奴」にして搾取する。

巨大IT企業は「クラウド領主」と化し、プラットフォームの利用者、すなわち「クラウド農奴」から、その属性や行動傾向など個人情報をも「地代」として徴収し、広告配信を通して収益化している。プラットフォームへの商品の出品者やアプリの開発者は「クラウド封臣」と名づけられ、手数料という名の「地代」を「クラウド領主」に納める。自由市場での価格競争はなく、資本主義の必須の要件を欠いているというのがバルファキスの見方だ。

商業資本主義から、国家への依存をインフラ整備などに限った産業資本主義へ、さらにインターネットの普及とともに新たなインフラ整備を自前でするようになったポスト産業資本主義へと推移してきた。それは資本主義が国家のくびきから解放されていく過程でもあった。

植民地貿易と遠隔地貿易を利潤の主要な源泉とする商業資本主義は、西欧の絶対王政による重商主義政策にあと押しされて発展した。植民地の獲得、貿易航路の開拓といったインフラ整備は国家の軍事力によってなされた。

労働力を利潤の源泉として興隆した産業資本主義は、機械制大工業のインフラとなる交通網や通信網、発電設備の整備を直接、間接に国家に頼った。しかし、商業資本主義のように軍隊の手を直接借りることはなかった。

これに対し、モノをつくらない第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義は、第2次産業の場合のような大規模な物理的インフラを必要としな

年金生活者 「テクノ」という言葉を使うなら、「テクノ封建制」より「テクノ絶対王政」と呼んだほうがいい。

プラットフォームでは当事者間の力関係は企業側が圧倒的に優位に立っている、利用者や出品者は企業の言いなりになるしかない。そこには中世ヨーロッパの封建制のような分権的なシステムはなく、中央集権的な支配が貫かれている。その体制は近世の西欧に成立した「絶対王政」に近い。GAFAMなどの企業は「クラウド領主」よりも「クラウド君主」と呼んだほうがいい。

30代 呼び名の違いがそんなに大事か？

年金 バルファキスが「封建制」という言葉を使うとき、それは主として経済システムを指している。それに対置させた「絶対王政」は政治体制を指す概念だ。もう少し厳密に言うなら、「封建制」が経済と政治の分離していないシステムであるのに対し、「絶対王政」では両者が分離している。いわば経済と政治が分離し始めた「封建

制」が「絶対王政」と言ってもいい。

プラットフォームによる支配を「テクノ封建制」と呼ぶ限り、それは資本主義にとって代わる経済システムであると同時に、民主制に取って代わる政治システムということになる。「テクノ絶対王政」と言い換えれば、それは政治システムに限定されるので、経済システムは必ずしも封建制とは限らない。実際、「絶対王政」下では商業資本主義が発展した。

30代 「絶対王政」のもとで暮らしている実感などないけどな。

年金 「絶対王政」はあくまでもネット空間上での話だ。その外にはれつきとした資本主義の世界が広がっている。たとえば世界的な自動車メーカーであるトヨタ自動車は、ネット空間ではなく、リアルな工場で車を生産し、リアルな市場でそれを販売し、「地代」ではなく「利潤」を獲得している。

資本主義の発展の歴史は、資本主義が国家から自立していく歴史だった。資本主義は、国家による丸抱えだった

い。それに代わってインターネットというソフトなシステムが産業の主要なインフラとなった。インターネットは米国防総省が開発したもののだが、その後の発展、普及は民間企業やオープン

ソースコミュニティによって担われた。国家は種をまいただけで、その後の栽培は資本主義自らが担った。

この流れを必然の過程と考えるなら、バルファキスが「テクノ封建制」と名づけたGAFAMのプラットフォーム、すなわち国家並みの大規模な再分配システムは、資本主義が国家の主要機能を自らの手で備えたことを意味し、国家の根幹部分からの自立を果たしたことを示している。それは「封建制」へのあと戻りというより、それに似た形を取った資本主義の前進とみなすことができる。

巨大IT企業による独自の再分配システムの構築は、既存の国家に対する新たな国家の独立宣言に等しいと言える。再分配は競争ではなく強制によって行われるので、そこだけ見れば、資本主義から封建制に歴史が逆流したように見える。しかし、それは海面下に隠れた巨大な資本主義の本体の先端部分と理解すれば、そこに資本主義の新たな到達点を見ることができる。

ニュース日記 981
中村 礼治

「テクノ封建制」をめぐって